

令和七年十二月度 御報恩御講拝読御書

義浄房御書

文永十年五月二十八日

五十二歳

相構へ相構へて心の師とはなるとも心を師とすべからずと仏は

記し給ひしなり。法華經の御為に身をも捨て命をも惜しまざれと

強盛に申せしは是なり。

令和七年十二月度 御報恩御講 『義浄房御書』 (御書六六九<sub>六</sub>一一行目〜一二行目)

【通釈】

決して心の師とはなるとも(凡夫の迷いの)心を師としてはならない、と釈尊は經典に記されている。法華經のためには身を捨てて命をも惜しまないようにと強盛に言ってきたのはこのことである。

【主な語句の解説】

相構へて…十分に注意して。必ず。決して。

心の師とはくすべからず…涅槃經師子吼品の經文(大正藏二一五三四)等による成句。正法を心の師とし、凡夫の迷いの心をもとに判断しないよう誡める。

【背景と大意】

本抄は、文永十(一二七三)年五月二十八日、日蓮大聖人が五十二歳の御時、佐渡において認められ、清澄寺住僧の義浄房へ送られた御書です。

義浄房は、安房(現在の千葉県)清澄寺の道善房の弟子で、大聖人の兄弟子に当たります。大聖人は入門当初、道善房はもちろんのこと、兄弟子の浄頭房と義浄房の二人から仏典を中心とした読み書きや、一般的な教育を受けられました。本抄の冒頭には、「御法門の事委しく承り候ひ畢んぬ」(御書六六八)とあることから、義浄房から法門について質問され、それに対する返書であると拝せられます。

内容はまず、法華經の功德というのには仏のみが知る甚深の境界であり、このことを天台大師は「妙は不可思議に名づく」(法華玄義・学林版玄義会本上九)と釈していることを示され、法華經の所詮は一念三千の法門にあることを述べられています。

続いて、一念三千の義は本門寿命品にあるとされ、特に「一心欲見仏 不自惜身命」(法華經四三九)の文を挙げ、この文によつて大聖人已心の仏果を顕し、三大秘法を成就されたことを明示されています。

さらに、「一心欲見仏」の文を妙法蓮華經の五字に配し、この妙法を弘通するためには身命も惜しまないというのが「不自惜身命」であると教示され、次いで、この經文を身をもって行じる大聖人こそ、無作三身の御本仏であることを示唆されています。そして最後に、義浄房に対して誡勸の二文を記し、本抄を結ばれています。